

こちらが映画の写真。絵と同じ質感が感じられるだろうか。中央の聖母マリアを演じるのはシャーロット・ランプリング。その右にはブリューゲルの姿も見える。

©kunsthistorisches Museum Vienna



こちらが元になった絵画。この絵の影を再現する際には、ガラス板をキャンドルで炙り、それをパソコンに取り込んだという精巧さ。



©2010, Angelus Silesius, TVP S.A.

■ **ブリューゲルの動く絵** | 2011年 / ポーランド・スウェーデン  
12月17日より、渋谷・ユロススペースほかにて全国順次公開

## ブリューゲルの名画が、 精緻な筆致そのままに動き出し、 語り出す画期的試み

眺めていると絵の中に迷い込むような感覚をおぼえる、ブリューゲルの名画『十字架を担うキリスト』。それぞれに異なる行動を見せる無数の人々が緻密に描き込まれたこの作品。タイトルからすれば、主人公はゴルゴダの地へ向かうイエス・キリストのはず。ところが、その姿は

見したところ、とても発見しにくい場所に描かれている。それは一体なぜなのか。

16世紀・ネーデルランドを生きた画家、ブリューゲルがこの絵に込めた意味。それを画期的な手法で解き明かす映画が、この冬、公開される。解き明かすといっても、ドキュメンタリーではない。ブリューゲルの名作絵画が、映像になって動き出すのだ。題して『ブリューゲルの動く絵』。部分ごとにクロージアップされた絵画の登場人物たちが、ごく何気ない日常風景の中で当時の生活や習慣を見せてくれる。絵画を一見しただけではわかりにくい人々の行動や謎の物体の意味するものが、その日常の中で明らかにになり、ブリューゲルがこの絵に込めた意味が、次第に立ち上がってくる。

「絵をよく見ると、岩山の風車から下に向かって、スパイラル状に幾つかのグループが点在している。それぞれの意味するものがつながって、ストーリーになっているんです。描かれた対象とその配置が意味をもって構成されている。一つひとつが、美しい絵で表現された『言語』なのです」

そう語るのは、監督であるレフ・マイエフスキ。その『言語』を丁寧に解き明かし、当時の生活事情を調

査しながら、二次元の絵画を三次元の映像へと慎重に起こしていったという。

「絵とよく似た風景をポーランドに見つけて、100人のエキストラで撮影を試みたのですが、悲劇でした。まったくブリューゲルの絵のようには見えません。当初、この絵はひとつのピースで描かれていると思っていました。けれど、複製を取り寄せ、コンピュータで解析してみたら、7つの異なるピースを組み合わせて出来ていることがわかった。ひとつの風景で撮っても再現できないわけです。」

なので、何層かに分けて、幾つかのブルースクリーンで人物を撮影し、実際の風景の映像と、私自身が描いた背景画を合成して、絵と同じ風景を作り上げるようになりました」

想像を絶する緻密な作業の末に完成した、絵画と同じ質感の動く絵。ブリューゲルの世界に入り込んだ時、あなたは何を体感するだろうか。



ブリューゲルの絵画に幼い頃から惹かれてきたというポーランドのレフ・マイエフスキ監督。自身もアーティストで、インスタレーションやオペラなど舞台の演出も手掛ける。